

江湖詩社の田園詩について：『四時田園雜興』の刊 行と性靈詩風の形成

王, 自強
九州大学大学院：専門研究員

<https://hdl.handle.net/2324/7393741>

出版情報：語文研究. 139, pp.28-42, 2025-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



江湖詩社の田園詩について

— 『四時田園雜興』の刊行と性靈詩風の形成 —

王 自 強

はじめに

十八世紀中頃から近代に至るまでのおよそ百五十年の間、多くの詩社が結成された。そのうち、天明七年（一七八七）に開かれた江湖詩社は、盟主市河寛斎と同人柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山らによつて運営されている。この詩社の竹枝詞と性靈詩風の形成や江戸後期の詩風革新との関係については、すでに揖斐高氏による一連の考察が備わっている。^(注1) また、竹枝詞のほか、江湖詩社の詩人たちが田園詩も多作したことはよく知られている。しかしながら、そうした江湖詩社の田園詩と性靈詩風との間に、いったいどのような関係があるのかに関して、ほとんど論じられていない。

江戸後期の田園詩について、揖斐高氏は、田園詩の流行には、「清新性靈の詩の伝播」と「南宋田園詩の影響」が背景にあると述べる。^(注2) ただし、氏の論は江戸後期の漢詩人佐羽淡齋の田園詩と性靈詩風との関係を中心に考察したものであり、江湖詩社の田園詩には触れていない。揖斐氏の言う「南宋田園詩」は、南宋三大家と称された范成大・陸游・楊万里の田園詩を指す。この三人は南宋三家としてひとまとまりにされているが、詩の特徴には違いが見られる。よつて、南宋三家それぞれの詩人と江戸後期の田園詩との関係を考察することで、江戸後期の詩壇における南宋田園詩受容の実相がより明瞭に見えてくるのではないかと思われる。

一方、江戸後期の田園詩に見える范成大の受容について、中村幸彦氏は「幕末の田園詩といえ、宋の田園詩人と称さ

れる范成大（石湖）の〈四時田園雜興〉六十首の影響は無視できない」と指摘する。^(注3)この指摘は、江湖詩社の田園詩における范成大の田園詩受容を考察する際に有益であろう。だが、氏は江戸後期の田園詩を概観した上で、主に田園詩と俳諧との関わりを論じており、江湖詩社の田園詩の具体的なあり様、およびそれがどのように『四時田園雜興』から影響を受けたのかを十分には論じていない。

そこで、本稿では、まず江湖詩社の詩人たちの『四時田園雜興』の出版活動を考察することで、江湖詩社の田園詩と范成大との関係を明らかにしたい。そして、如亭・詩仏・五山の田園詩に見られる性靈詩風の様相を検討する。

一、『四時田園雜興』の出版と江湖詩社の詩人たち

現在、確認できる『四時田園雜興』（以下『雜興』）の和刻本について、杉仁氏は「在村文化のアジア交流と書物出版活動」において、「南宋田園詩和刻本一覽表」を作成し、『雜興』の四つの和刻本に言及した。^(注4)氏の整理によれば、その四つの和刻本は、成趣園本（享和三年（一八〇三）跋刊、早稲田大学図書館所蔵）、刊行年次不明本（同所蔵、以下年次不明本）、晚晴堂本（享和三年序刊）および『和刻本漢詩集成』所収の

影印本（以下集成本）である。ただし、それらの刊本の系統については、考察されていない。

また、氏は地方詩壇の田園詩出版を論述する際に、もっぱら成趣園本を取り上げて考察を行った。実は、杉仁氏が言及した『雜興』の刊本以外にも、大窪詩仏が刊行した『宋三家絶句』（享和三年刊）と『范石湖詩鈔』（文化元年（一八〇四）刊）にも『雜興』の詩が含まれている。したがって、単行本『雜興』の和刻本の系統や、『宋三家絶句』と『范石湖詩鈔』所収の『雜興』の詩については、再考する必要があると考えられる。

まず、単行本『雜興』の和刻本の系統について検討する。成趣園本の巻末には、伊達^(注5)筆亭の享和三年三月の跋文が書き入れられている。その文中に筆亭は、この和刻本の出版経緯に関して、「暇日、拔其詩詞雜俎中、家刻以自甄（暇日、其れを『詩詞雜俎』の中より抜き、家刻して以て自ら甄ぶ）と述べている。ここに言及される『詩詞雜俎』は、明末の蔵書家・出版家である毛晋（書齋名は汲古閣）が編纂したもので、范成大の『雜興』や宋の李清照著『漱玉詞』、および元の杜本編『谷音』などの十二種の作品集を収録している。^(注6)成趣園本『雜興』の特徴について、杉氏は「原典の柱下部〈汲古園〉をのぞき、楷書の字形、各行の字配り、各丁の行数など、柱上

部（石湖詩）もふくめ、すべてそのまま覆刻。もちろん白文のまま訓点なし」と説明している。^(注7)

次に、成趣園本と同年に刊行された晚晴堂本について確認する。見返しに「晚晴堂」とあることから、晚晴堂本と言われている。寛政七年（一七九五）、柏木如亭は信濃国中野の晚晴堂に移り、晚晴吟社を開いた。晚晴堂刊本の『雑興』には訓点があり、巻頭には如亭による享和三年九月の序文が付されている。晚晴堂本の本文にある字形や各丁の行数、各行の字配り、一字分空けの位置は、原刻本『詩詞雑俎』所収の『雑興』と同じである。また、原刻本の柱上部にあった「石湖詩」や柱下部の「汲古閣」の文字はなく、柱の中間部分に「石湖詩」とある。このように見ると、晚晴堂本は、柱の部分を除き、原刻本をもとに覆刻されたものであろう。

また、集成本について、長沢氏は『和刻本漢詩集成』第十五輯の解題に「詩詞雑俎を覆刻した成趣園刊本の刊行の跋を去って覆刻したものか。成趣園刊本には匡郭上の校語なく、大沼枕山の序はない」と述べている。^(注8)しかし、原刻本『詩詞雑俎』や成趣園本、集成本を比較すると、集成本は成趣園本ではなく、むしろ原刻本を覆刻したものだと考えられる。その理由は、二つある。まず、集成本の柱に見られる「石湖詩」と「汲古閣」は、原刻本と全く同じである。だが、先に述べ

たように、成趣園本の柱においては、「汲古閣」が削られ、「石湖詩」のみが残されている。また、それらの刊本の字形を比較すると、集成本の字形は成趣園本よりも原刻本に近い。たとえば、左図のように、巻頭の二つ目の序文の三行目、上から六文字目の「刻」という字を見れば、図3の「刻」の左側、第五画目の「ノ」は、図1と同様に、第四画目の「ノ」より短い。このような例は、ほかの箇所にも多数見られる。なお、巻頭に大沼枕山の序文があることから、集成本は幕末明治期の欄外に八条の頭注が印刷されていることである。それらの頭注は、原刻本や成趣園本には見られないため、覆刻の際に追加されたものであろう。



最後に、年次不明本であるが、これについては、序跋などの情報がないため、いつ、誰によって刊行されたのかについては、未詳である。ただ、原刻本や成趣園本、集成本に比べ

ると、年次不明本は巻頭の大沼枕山の序文がない点を除けば、集成本と全く同じものである。また、集成本が鮮明な文字や均等な枠線を保っているのに対し、年次不明本には文字や枠線がかすれている箇所が多く見られる。よって、年次不明本は、後に集成本から枕山の序文を除いた上で、その板木を使って印刷されたものであろう。

以上、現存する『雑興』の和刻本の系統を整理した。成趣園本（享和三年）や、晚晴堂本（享和三年）、集成本（幕末明治期）は、原刻本『詩詞雜俎』所収の『雑興』をもとに、覆刻されたものである。また、年次不明本は集成本の後印本である。

では、それらの和刻本『雑興』の出版と江湖詩社の詩人たちとの間に、どのような関係があるのかについて、考察する。まず、成趣園本を刊行した伊達筆亭と関係の深い人物に菊池五山がいる。寛政十一年（一七九九）から文化二年（一八〇五）まで、五山は四日市に滞在したときに、筆亭から大きな庇護を受けていた。^(注9)五山と筆亭との交わりについては、伊達筆亭宛菊池五山書簡（二十八通現存）に詳しく書かれている。^(注10)その中に、『雑興』に関する書簡が三通ある。

たとえば、「昨日は拝顔、大幸仕候。且亦田園雜興校正仕候処、七八ヶ処誤り御座候間、則上へ直し之下札いたし」と書

かれるように、五山は『雑興』の校正稿における七、八箇所の誤りを訂正した。また、五山は「此本（田園雜興、筆者注）京師へ遣し候間、左様思召可被下候。仕立万々三亥へ申遣候、部数之所斗被仰遣可被下候」、「尚々田園雜興志部適齋へ遣し可被下よし、早速相達可申候」という二通の書簡を筆亭に送り、和刻本『雑興』の流通を促進した。ここの「三亥」は市河寛齋の息子市河米庵、「適齋」は五山と交わった文人原適齋である。このように、『雑興』の刊行について、筆亭は菊池五山から大きな力を得たのであろう。

筆亭の出版活動に対して、杉仁氏は「寛齋はじめ江湖詩社の清新性靈派が手本とみなしていた南宋田園詩集、その和刻本の一先駆であり、唯一の地方出版となった」と評価する。^(注11)しかし、成趣園本が刊行された二年前、大窪詩仏らすでに陸游の田園詩を含む詩集『放翁先生詩鈔』（享和元年（一八〇一）刊）を上梓していた。その後、『宋三大家絶句』や『范石湖詩鈔』、『三家妙絶』（文化四年（一八〇七）刊、市河寛齋編、菊池五山など跋）および『広三大家絶句』（文化九年（一八一二）刊、大窪詩仏・菊池五山編）などの范成大に関する詩集が続々と世に出された。こうした江湖詩社の三家詩の出版営為の流れの中で、筆亭は『雑興』を刊行したのではないかと思われる。

また、先述のように、晚晴堂本『雑興』は、江湖詩社の同人柏木如亭によって刊行されたものである。さらに、集成本『雑興』の巻頭には、幕末明治期の漢詩人大沼枕山の序文が付けられている。本文に訓点と漢字片仮名の書き入れが多数あり、巻末に「枕山先生講述」と墨書している。この刊本は、枕山の『雑興』の講義を書き入れたものであろう。天保六年（一八三五）、十八歳の大沼枕山は、菊池五山の門に入り漢詩を学んでいた。このように、後年枕山が『雑興』の講義を行ったのは、やはり五山の『雑興』の出版活動から影響を受けたからだろう。

以上、成趣園本と晚晴堂本の出版は、それぞれ地方に在住していた菊池五山と柏木如亭に関わっている。しかしこの頃、江戸に活躍している大窪詩仏は、『雑興』の出版にも尽力していた。

文化元年（一八〇四）、大窪詩仏と山本北山の息子山本緑陰は、和刻本『范石湖詩鈔』（清人周雪蒼・柴錦川原選、三卷三冊）を刊行した。この詩集には、六十首の組詩『雑興』の中の三十一首が収録されている。また、詩仏と緑陰は、南宋三家の七言絶句を集めた『宋三大家絶句』の「石湖百絶」の中で、

田園雑興六十首刊置石湖書院。蓋公平生得意之作也。不

可取捨一首。而清周雪蒼・柴錦川所選石湖詩鈔三十一首、向已上梓、与放翁詩鈔同行於世。故今取其余二十九首云。（『田園雑興』六十首を刊して石湖書院に置く。蓋し公の平生得意の作なり。一首を取捨すべからず。而して清の周雪蒼・柴錦川の選する所の『石湖詩鈔』三十一首、向に已に上梓し、放翁詩鈔と共に世に行はる。故に今其の余りの二十九首を取ると云ふ。）

という割注を書き、『范石湖詩鈔』に収められていない『雑興』の二十九首を意識的に上梓した。^(注15)このように、大窪詩仏らの一連の出版活動によって、文化元年頃の中央詩壇においても、『雑興』の全貌が見えるようになった。

以上のように、享和・文化頃、白文本や訓点本および選集本の『雑興』が次々と世に出され、江湖詩社の詩人たちによって主導された『雑興』の出版ブームは、江戸後期の詩壇における田園詩の創作を促した。そこで次節では、江湖詩社の田園詩に見られる『雑興』の受容を検討する。

二、江湖詩社の田園詩に見る『四時田園雑興』の受容

大窪詩仏と佐羽淡斎の田園詩に見られる范成大『雑興』の

受容については、すでに報告がある。たとえば、揖斐高氏は、淡斎の「桐生竹枝」其四（『淡斎百絶』所収、文化六年（一八一八））

○九（序刊）の転句「沸湯煮雪湧波時」（湯を沸かして雪を煮て 波を湧かす時）は、范成大の「右夏日田園雜興十二絶」

其四の前半二句「百沸繰湯雪湧波、繰車嘈囀雨鳴蓑」（百沸の繰湯 雪を湧かす、繰車嘈囀として 雨 蓑に鳴る）の

影響を受けたものであると指摘する。また、詩仏の「田家二首」其二（『卜居集』所収、寛政五年（一七九三）序刊）の転

句「繰湯湧雪上繰車」（繰湯雪を湧かして 繰車に上る）は、范成大の詩から影響も受けたと、山口句氏は述べる。^{（注17）}

しかしながら、その詩以外にも、江湖詩社の田園詩には、『雜興』の受容が見られる。寛政五年頃に掲載された大窪詩仏

の最初の漢詩集『卜居集』には、多くの田園詩が収められている。^{（注18）}その中でも、組詩「村居四時雜題十九首」は、「右早春」

「右晚春」「右夏」「右秋」「右冬」の部類とされている。こうした部類は、『雜興』における「右春、日田園雜興十二絶」

「右晚春、田園雜興十二絶」「右夏、日田園雜興十二絶」「右秋、日田園雜興十二絶」「右冬、日田園雜興十二絶」とほぼ同じである。

寛政期頃、『雜興』の和刻本はまだ刊行されていないが、詩仏は唐本の范成大詩集を参照しながら、「村居四時雜題十九首」

を詠んだと思われる。^{（注19）}

まず『雜興』と「村居四時雜題十九首」における鱸魚詠を見てみよう。

◆范成大「右秋日田園雜興十二絶」其十一

細擣橙壘買膾魚 細かに橙壘を擣きて 膾魚を買ふ

西風吹上四腮鱸 西風 四腮の鱸を吹き上す

雪鬆酥膩千糸縷 雪鬆酥膩 千の糸縷

除却松江到处無 松江を除却すれば 到る処無し

◆大窪詩仏「村居四時雜題十九首」其十七

新釣鱸魚得四腮 新たに鱸魚を釣りて 四腮を得たり

且呼隣叟尽三杯 且つ隣叟を呼びて 三杯を尽くさしむ

話頭忽識觀潮節 話頭忽ち識る 觀潮節を

自至前溪繫艇回 自ら前溪に至りて 艇を繋ぎて回る

范成大の鱸魚詠の結句「松江を除却すれば 到る処無し」

のように、「四腮鱸」は松江の特産品。これについては、十八

世紀初め頃に成立した『和漢三才図会』（寺島良安著、正徳二

年（一七一二）序刊）に「本綱、鱸凡黑白、曰盧。此魚白質

黑章、故名之。淞江尤盛」（『本綱』に、（鱸は凡そ黑白を盧と

曰ふ。此の魚白質黑章、故に之れと名づける。淞江尤も盛ん

なり」と記されている。淞江は松江ともいい、現中国江

蘇省から出て上海の黄浦江と合流する川である。詩仏はどこ

の川で四腮の鱸を釣ったのかが分からないが、その「四腮」

の詩語は、やはり范成大の『雜興』から学んだ可能性が高い。文化九年（一一八二）、詩仏と親交があった佐羽淡齋は、『雜興』の二十九首を収録した『宋三大家絶句』（大窪詩仏・山本緑陰編、享和三年（一一八〇三）序刊）の注釈書『宋三大家絶句箋解』を刊行した。その注釈書において、范成大の鱸魚詠に関する注釈がある。「四腮鱸」の語釈について、淡齋は、漢籍を引きながら、

談苑、松江鱸魚、長橋南所出者四腮、天生膾材也、味美肉緊。隋唐佳話、吳郡獻松江鱸魚。煬帝曰、金齏玉膾、東南佳味。南人鱸膾以細縷、金橙伴之、号金齏玉膾。

〔談苑〕に、「松江の鱸魚、長橋の南出づる所の者四腮、天生の膾材なり、味美く肉緊る」と。『隋唐佳話』に、「吳郡、松江鱸魚を献ず。煬帝、（金齏玉膾、東南の佳味なり）と曰ふ」と。南人の鱸膾は細縷を以て、金橙之に伴ひ、金齏玉膾と号す。）

と書いている。傍線部のように、四腮の鱸の分布は松江の長橋の南に限られている。また、「金齏玉膾」の言葉は、文政元年（一一八一）頃に成立した柏木如亭の漢詩文集『詩本草』（文政五年（一一八二）刊）にも見える。『詩本草』の第三〇条は「鱸魚」を題とし、二首の鱸魚を詠んだ七言絶句を収めている。その中の一首の後半には「金齏玉膾玻璃月、併供中

秋一夜游」（金齏玉膾、玻璃の月、併せて中秋一夜の游に供す）とある。このように、如亭は鱸魚を詠む際に、淡齋が作成した『雜興』の注釈書を参照したのではないかと考えられる。

また、『詩本草』においては、『雜興』の菘すなを詠んだ詩が引用されている。その詳細については、『詩本草』第八条「蔬菜」に次のような文章がある。

信濃積雪中所挑之菘、勝于吾郷春時之鶯菜者。范石湖所謂撥雪挑來蹋地菘也。

（信濃の積雪の中に挑ぐる所の菘、吾が郷の春時の鶯菜なる者に勝れり。范石湖が謂ふ所の「雪を撥して挑げ来る蹋地の菘」なり。）

右の傍線部に引用されたものは、『雜興』「右冬日田園雜興十二絶句」其七の起句である。「菘」は蔬菜の名。如亭は信濃に滞在した時に、積雪の中の菘を見て范成大の菘を詠じた詩を想起したのであろう。

以上のように、詩仏・如亭らは、作詩の際に積極的に『雜興』およびその注釈書の語彙を使いながら、田園詩を詠んでいる。このような詩の字句の模倣について、揖斐高氏は「この模倣・剽窃は、古文辞格調派の擬古主義的な模倣・剽窃とは、異質のもの」だと指摘している。その理由について、氏

は、

古文辞格調派の擬古主義的な模倣・剽窃は、作者自身が日々生きている現実とは切斷された、観念的な世界を構築するための方法であった。それに対し、淡齋がこれら詩で見せている模倣・剽窃の痕は、淡齋が日々経験している現実の風景や生活を、過不足なく的確に表現するために、范石湖の「四時田園雜興」の表現を利用しようとした結果にはかならないように思われる。

と述べている。^(注20)「現実の風景」を詠じるといふ作詩方法は、中村幸彦氏が言った「現実の対象を反映した自己の性霊を詩にうつす写実的な作品を求めるといふ性霊詩の作り方と軌を一にするものであろう。淡齋・詩仏らは、范成大の田園詩の表現を借用しながら、目の前の風景を吟詠する性霊詩を作った。范成大を含む南宋三家の詩を学ぶことと性霊詩風の形成との関係について、市河寛斎は詩仏の詩集『詩聖堂詩集初編』(文化六年(一八〇九)刊)の序文において次のように述べ

今茲其門人為梓詩集、天民來乞余序。余檢其詩、清新平和、出於自然、甚似其為人。蓋生平尽心於南宋三家。三家之粹、結為之繡腸。宜哉、詩仏之名以傾動一時。

(今茲、其の門人詩集を梓^{あずさ}にせんとし、天民來たりて余の

序を乞ふ。余、其の詩を検するに、清新平和、自然に出て、甚だ其の為人に似たり。^{ひとごと}蓋し生平心を南宋三家に尽くす。三家の粹、結して之の繡腸^{しゅうちやう}と為る。宜なるかな、詩仏の名以て一時を傾動すること。)

「天民」は詩仏の字。「清新」は清新性霊、「平和」は平淡や平穩の意味である。この二つの言葉は、平淡な詩風を尊ぶ時代において、最高の評価だと言っても良い。作詩に際して、どのように清新性霊の詩を作るのかについて、次節では、江湖詩社の田園詩と性霊詩の作詩方法との連繋を検討する。

三、田園詩と作詩の方法

柏木如亭は、晚晴堂本『雜興』の序文の中で、陸放翁雖万首、不免支離病。楊誠齋雖纖巧、要為無法。茲刻石湖四時田園雜興六十首。初学説之、行且陞唐矣。楊誠齋嘗評石湖詩云、清新斌媚、奄有鮑謝。奔逸雋偉、窮追太白。吾、第取其渾成無支離病、非有取於其似鮑謝太白也。癸亥重陽、如亭柏昶書。

(陸放翁万首ありと雖も、支離病を免れず。楊誠齋纖巧なりと雖も、要は無法を為す。茲に石湖四時田園雜興六十首を刻す。初学は之を読み、行且に唐に陞らんとす。楊

誠齋、嘗て石湖の詩を評して云く、「清新、斌媚、鮑・謝を奄有す。奔逸雋偉、太白を窮追す」と。吾、第だ其の渾成にして支離病無きことを取り、其の鮑・謝・太白に似たるを取ること有らざるなり。癸亥重陽、如亭相稔書す。

と述べている。ここでいう「清新」は、清新性靈の詩風を意味する。如亭は楊万里（誠齋）の言葉を引いた上で、范成大『雜興』の清新性靈の詩風を称賛した。『雜興』における性靈詩風について、市河寛齋は、文化五年（一一八〇）に漢文「純田園雜興」（『寛齋漫稿』下卷所収）に、「范石湖田園詩清新幽雅、極尽田畷紅婦之態。余酷愛其詩」（范石湖田園詩、清新幽雅にして、極めて田畷紅婦の態を尽す。余、酷だ其の詩を愛す）と説いている。

また、右に引いた傍線部のように、陸游は約一万首の詩を作っても支離病を犯したこと、および范成大の田園詩には支離病がないと、如亭は主張している。支離病は詩病の一つで、空海の『文鏡秘府論』（弘仁年間（八一〇）〜八二四）成）や赤沢一堂の『詩律』（天保四年（一八三三）刊）などに言及されるものの、詳しい説明はない。晚晴堂本『雜興』の序文を書いた十五年後、如亭は支離病と作詩の方法について、『詩本草』第三十六条に次のように記述している。

吾邦近世詩人以其詩為詩。漢魏六朝古風姑置。所謂近体

者未嘗依法、概為五言八句・七言八句・五言四句・七言四句耳。其詩非不佳、可惜不免支離病。夫作詩不免支離病、雖日累數百首、終身不得稱詩人也。〈中略〉雖然詩不依法、享保以來恒例、不足深怪近人。

（吾が邦の近世の詩人、①其の詩を以て詩と為す。漢魏六朝の古風は姑く置く。②所謂近体は未だ嘗て法に依らず、概して五言八句・七言八句・五言四句・七言四句を為すのみ。③其の詩、佳ならざるに非ざるも、惜しむべし、支離病を免れざるを。④夫れ詩を作りて支離病を免れざるは、日に數百首を累ぬと雖も、終身詩人と稱せらるることを得ざるなり。〈中略〉⑤然りと雖も詩の法に依らざるは享保以來の恒例にして、深く近人を怪しむに足らず。）

傍線部①・②のように、当時の詩人は作詩のルールを守らず、五言八句・七言八句・五言四句・七言四句という詩の形式だけに従って詩を詠じていると、如亭は批判していた。次に、傍線部③のように、このような作詩の方法で詠まれた詩は、良いところ或いは秀句があるかもしれないが、支離病を免れなかったのである。そして、傍線部④のように、如亭は作詩に際して、もし支離病の問題を解決しなければ、数多くの詩を作っても詩人とは言えないと戒めている。

最後に、傍線部⑤のように、このような作詩の欠点は、享

保期からすでに存在していた。周知のように、享保から天明まで詩壇を主宰したのは、徂徠一門だった。よって、如亭の発言は古文辞派批判のニュアンスも含めていたのであろう。支離病のない范成大の田園詩は、性靈詩として、まさしく當時の漢詩人が学ぶべきものであった。

同じ文政期に、大窪詩仏は山本北山の門人岡部菊涯とともに、性靈詩の詩題を作る指南書『清新詩題』（二冊、文政十二年（一八二九）刊）と『清新詩題続』（二冊、同刊）を編纂した。ここでは、詩題の分類について、「春類」「夏類」「秋類」「冬類」「雑類」「題面類」という六つの部類を立てている。その中の「春類」から「冬類」までの分類は、范成大『雑興』における四時の分類とほとんど同じである。とくに、『清新詩題』『清新詩題続』には田園詩の題が多い。たとえば、「田家雑興」や「蔬園雑興」および「夏日田園雑興」などの詩題は、范成大の『四時田園雑興』を意識して作られたものであろう。詩題の重要性について、詩仏は『清新詩題』の序文に、

作詩難。命題亦不易。世人但古詩之為難、而能極推敲之力。猶至乎題、則漫然下筆、亦知其不易無。古詩有詩、而後有題。自唐以詩取士、先命題、而後作詩。其間或有先詩後題者、亦不過十一耳。要之題自有一種字法、而不与他文相比。

（作詩難し。命題も亦た易からず。世人但だ古詩を難と為し、而して能く推敲の力を極む。猶ほ題に至れば、則ち漫然と下筆して、亦た其の易からざるを知るは無し。古詩に詩有りて、而る後に題有り。唐自り詩を以て士を取るに、先づ命題して、而る後に詩を作る。其の間、或は先づ詩ありて後に題する者有るも、亦た十の一に過ぎざるのみ。之を要するに題自ら一種の字法有り、而して他文と相ひ比せず。）

と指摘している。作詩の際、押韻や平仄の規則に従うのみならず、詩題の字法もある。范成大の『雑興』の題を参照しながら、多くの清新詩題を作るのは、その詩題の字法を学ぶ方法の一つであると考えられる。

以上のように、柏木如亭や大窪詩仏は、范成大『雑興』の影響を受けつつ、支離病のない詩や清新の詩題を作ろうとした。

それに対して、菊池五山は和歌題田園詩を詠作することで、性靈詩風を実践した。

泊水鶏

蘆蕩月沈風露凄

嘈嘈底事不停啼

孤舟敲破五更夢

泊の水鶏

蘆蕩月沈みて風露凄まじ

嘈嘈底事ぞ 啼くを停めず

孤舟敲き破る 五更の夢

泊処最嫌聴水鶏 泊処最も嫌ふ 水鶏を聴くを

この七言絶句は、菊池五山の『五山堂和歌題絶句』（一卷一冊、天保十年（一八三九）序刊）に収録され、田舎の河川および湖沼の水際に鳴いている水鶏を詠じた田園詩である。だが、そもそも「泊水鶏」は、詩の題ではなく、和歌の題としてよく使われてきた。そして百首の『五山堂和歌題絶句』において、「泊水鶏」のほか、「早苗多」や「村夕立」および「曉野分」などの多くの農村風景を詠んだ和歌題漢詩が見られる。五山の和歌題田園詩に対して、柏木如亭は『詩本草』第三四条「水鶏」に次のように評価している。

葦蕩之中、有二小禽。一喚做跋模、一喚做孤勝捺。〈中略〉夏至之後、夜鳴達旦。池五山取而入詩、清新独絶。此君今日復于詩中得一知己。可謂幸矣。

葦蕩の中、二小禽有り。一を跋模と喚び做し、一を孤勝捺と喚び做す。〈中略〉夏至の後、夜鳴きて旦に達す。池五山取りて詩に入れて、清新独絶なり。此の君、今日復た詩の中に一知己を得たり。幸と謂ふべし。

如亭が評価した水鶏に関する詩は、五山の和歌題田園詩「泊水鶏」である。ここの「清新」は、清新性靈の詩風を指し、「独絶」は最も素晴らしいという賛美の意をあらわしている。五山のように、和歌題と田園詩の二つの要素をあわせて詠ま

れた漢詩は、やはり珍しいもので、一種の新鮮さがあつたのだらう。このような和風の要素がある田園詩は、詩仏の詩集『詩聖堂詩集初編』（文化六年（一八〇九）刊）巻六にも見られる。

村中晩歩 在信濃作 村中晩歩 信濃に在りての作

涼風吹面快 涼風 面を吹きて快し

林影日將斜 林影 日將に斜かんとす

雨近稠山帯 雨近くして山の帯稠し

径危多石車 径危くして石車多し

禾畦半結実 禾の畦 半ば実を結び

稲壘未収花 稲の壘 未だ花を収めず

農父已知客 農父 已に客を知り

相逢揖路叉 相ひ逢ひて路叉に揖す

廬山記、天將雨、則有雲、或冠峰岩、或亘中嶺、俗謂之山帯不出、三日雨。山路小石、人誤踏之、則転而仆。信濃人、謂之石車。〔廬山記〕に、「天將に雨ふらんとすれば、則ち雲有り、或は峰の岩に冠り、或は中の嶺に亘り、俗に之を（山の帯出でざれば、三日のうちに雨ふる」と謂ふ」と。山路の小石、人誤りて之を踏めば、則ち転びて仆れる。信濃の人、之を石車と謂ふ。）

この五言律詩の頷聯には「石車」という言葉が使われている。詩仏は本詩の後の詩注に、この言葉の意味は漢語の「石車」ではなく、信濃の方言の「山路の小石」だと解釈している。詩仏は、寛政期頃に『雑興』の田園詩を模倣しながら、「村居四時雜題十九首」を詠じたが、化政期になると、和語を使った清新一詩題を作ったりして、独自の田園詩の作詩方法を模索していた。菊池五山も和歌題で田園詩を詠んだことよって、独自性のある作品を作った。このように、江湖詩社の詩人たちは、田園詩で性靈詩風を實踐した際に漢詩の日本化を促進した。田園詩がもたらした漢詩の日本化について、又夢逸老は范成大『雑興』の注釈書『田園雜興講弁』（一卷一冊、文政元年（一八一八）刊）において、

石湖田園雜興意趣極深、我則反之說吾田園雜興也。人各有田園雜興、則說此編者又依吾說、而各自識其田園雜興。是吾說此詩之志也。

（石湖の『田園雜興』は意趣極て深く、我則ち之を反りて吾が田園雜興を説くなり。人各おの田園雜興有らば、則ち此の編を読む者又た吾が説に依りて、各自其の田園雜興を識る。是れ吾が此の詩を説くの志なり。）

と唱えている。著者の又夢逸老は未詳。巻頭には江戸後期の儒者山梨稲川の序文がある。「吾が田園雜興」や「人各おの田

園雜興有らば」の表現は、自分で自分の田園詩を作るべきだという意味であろう。江湖詩社の同人たちが詠んだ独自性のある田園詩は、范成大的『雑興』の模倣から脱して、まさしく日本の漢詩人の「田園雜興」となったのである。

おわりに

本稿では、江湖詩社の詩人たちの范成大『雑興』の出版や受容を手がかりとして、江湖詩社の田園詩と性靈詩風との関わりを明らかにした。このような性靈詩風を實踐した田園詩の創作は、江湖詩社のまわりの詩人にも影響を与えた。江戸後期の漢詩人宇野嘉充は、かつて江湖詩社の詩人と交わりがあった。五山は、嘉充の詩集『四時雜詠』（文政三年（一八二〇）序刊）の序文に「宇龐卿、曩昔以詩參江湖社」（宇龐卿、曩昔詩を以て江湖社に參る）と記述した。また、朝倉豊昭なる人物が『四時雜詠』の序文に、

其中四時雜詠者、尤為清新可觀。乃乞五山校定而上諸梓。（其中の『四時雜詠』は、尤も清新にして可觀たり。乃ち五山に乞ひて校定して諸を梓に上す。）

と書いたように、嘉充は江湖詩社から影響を受けつつ、清新性靈の詩を作ったのだろう。市河寛齋の息子市河米庵は、こ

の詩集の跋文の中で「嗟、充龐卿之詩、清新流麗」(嗟、充龐卿の詩、清新流麗なり)と評価している。また、『四時雜詠』の部類は、「右春日雜詠二十五絶」「右夏日雜詠十三絶」「右秋日雜詠十八絶」「右冬日雜詠十四絶」であり、まさしく范成大の『雜興』から学んだものであろう。

田園詩はどのように性靈詩風を実践したのかについて、柏木如亭は「冬日村居」(『如亭山人遺稿』卷三所収、文政五年(二八三三)刊)の七言絶句の後半に「何必深山窮谷隱、村居事事入詩新」(何ぞ必ずしも深山窮谷に隠れん、村居の事事詩に入りて新たなり)と詠んでいる。簡単に言えば、田園の風景を詠じるならば、一種の新しさが感じられるということである。

なお、この時期に性靈詩風をあらわにした吉原詞や竹枝詞も流行っていた。当時の詩壇において、最も人気を博したのはおそらく竹枝詞であろう。幕末頃に刊行された白文本『雜興』の巻頭には、七言絶句の形で大沼枕山の序文が掲げられている。

読田園雜興

『田園雜興』を読む

不是香奩即竹枝

是れ香奩こうげんならざれば即ち竹枝

田園幽趣入詩稀

田園の幽趣 詩に入ること稀なり

幽風千古無人会

幽風ひんかう千古 人の会する無く

只有此公能發揮 只だ有り 此の公の能く發揮すること

枕山序

枕山序す

本詩の起句の「香奩」は香奩体の艶詩すなわち吉原詞、「竹枝」は竹枝詞を意味する。当時の詩壇において、艶詩としての吉原詞と艶っぽい竹枝詞が多すぎるのに対して、田園詩は少ないと、枕山は述べている。詩の後半は、『雜興』を『詩經』の「幽風」に譬えている。

吉原詞と竹枝詞に関する研究は、すでに多く見られる(金22)。しかし、江戸後期の詩壇においては、艶詩と言われた吉原詞・竹枝詞のほか、田園詩の創作ブームも見られる。江湖詩社の詩人たちは、范成大の田園詩の校定・刊行に携わりながら、多くの田園詩を詠むことで、当時の性靈詩風の形成および普及に大きな功績を残していたと考えられる。

注

(1) 竹枝詞と詩風革新との関係について、掛斐高氏は「江湖詩社と遊里詞(上)——江戸詩壇の革新をめぐって——」(『国語と国文学』第五一卷第三号、一九七四年三月)や「江湖詩社と遊里詞(下)——江戸詩壇の革新をめぐって——」(『国語と国文学』第五三巻第五号、一九七四年五月)や「竹枝の時代——江戸後期の風俗詩——」(『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年)および「江湖詩社の出発——市民文学としての漢詩へ——」(『国文学・解釈と鑑賞』第七三巻第十号、二〇〇八年十月)などの論

文を発表した。

- (2) 揖斐高「郷村風景の発見」(『江戸の詩壇ジャーナリズム——「五山堂詩話」の世界——』角川書店、二〇〇一年) 二二八―二三一頁。

- (3) 中村幸彦「幕末の田園詩」(『中村幸彦著述集』第七卷、中央公論社、一九八四年) 三四二頁。

- (4) 杉仁「在村文化のアジア交流と書物出版活動」(『近世の在村文化と書物出版』吉川弘文館、二〇〇九年) 一二二頁。

- (5) 伊達箒亭は四日市の文人。名を氏伴、字を子奂、号を箒亭・免圃、別名を源三郎、通称を伊達太右衛門という。彼は詩人であるが、寛政五年五月に宣長に入門し、和歌も嗜んでいた(兄玉幸多監修『四日市市史』第十卷・史料編、四日市市発行、一九九六年、九二―九三頁)。

- (6) 『詩詞雑俎』の諸伝本の一つである内閣文庫本によれば、見返しには、『衆妙集』『剪綯集』『四時田園雜興』『月泉吟社』『谷音』『河汾諸老詩』『三家宮詞』『二家宮詞』『二妙詞』『漱玉詞』『断腸詞』『女紅餘志』という十二種作品集の名前が記されている。また、見返しに「汲古閣原本」「古松堂藏板」とあることから、この伝本は、明人毛晋によって出版されたものをもとに、古松堂主人すなわち清人・范昌が覆刻したものである。巻頭に蔵書印「林氏蔵書」や「述齋鑑蔵図書之記」とあることから、この唐本は林述齋の旧蔵本であろう。

- (7) 前掲注(4)に同じ、一一九頁。
- (8) 長沢規矩也「解題」(長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』第十五輯、汲古書院、一九七六年) 三頁。

- (9) 菊池五山は『五山堂詩話』(文化四年序刊) 卷四に「余在伊勢、大抵居北。故拳其人多略於南。北勢最著者、蔵書則高果亭吉、

好事則伊達亭伴。二亭皆嘗為余臯伯通。(中略) 箒亭最愛人物、客之東西上下者來投刺其門、必置紙筆以要其伎。無賢無愚、相對驩然。故其所蓄古今書画殆不勝鴻富」(余伊勢に在り、大抵北に居る。故に其の人を挙げれば多く南に略す。北勢最も著る者、蔵書は則ち高果亭吉、好事は則ち伊達亭伴。二亭皆嘗て余が臯伯通たり。(中略) 箒亭最も人物を愛し、客の東西上下する者來たりて刺を其の門に投すれば、必ず紙筆を置き以て其の伎を要す。賢と無く愚と無く、相對して驩然たり。故に其の蓄ふる所の古今の書画殆ど鴻富に勝へず)と書き、伊達箒亭のことを回想した。

- (10) 大谷篤藏・尾形仿・信多純一・田中善信が翻刻した『菊池五山書簡集』は、三十四通の菊池五山直筆の書簡を取録している。その中に、伊達箒亭に宛てた書簡が二十八通ある。ただし、大谷篤藏らは翻字の際、宛先としての伊達箒亭の号「免圃」を「兔園」と誤っている(『菊池五山書簡集』松平文庫発行、一九八一年、八一―八七頁)。

- (11) 前掲注(10)に同じ、三頁。

- (12) 前掲注(10)に同じ、三頁。

- (13) 前掲注(10)に同じ、六頁。

- (14) 前掲注(4)に同じ、一一九頁。

- (15) 揖斐高氏は『宋三大家絶句』の注釈書『宋三大家絶句箋解』(佐羽淡齋著、文化九年刊)を考察した際、そこに収録された『雜興』の二十九首を三十一首と誤っている(前掲注(2)に同じ、一三二頁)。

- (16) 前掲注(2)に同じ、一三三頁。

- (17) 山口句「卜居集卷之下」注釈(二) 村居四時雜題十九首他(『成蹊人文研究』第二三号、二〇一五年三月) 二八頁。

(18)

『卜居集』は全一三五首、六九首の田園詩を収録している。それらの田園詩の詩題は、「村家」「郊村」「春日幽居」「山莊十首」「過友人村居」「家居」「石子亭村屋分得江韻」「村居」「山居三十首」「田家二首」「郊村」「村居四時雜題十九首」である。

(19)

『商舶載來書目』に「享保八癸卯年／范石湖詩集 一部一套」や「宝曆十庚辰年／石湖詩集 一部一套」と記されるように、范成大の詩集が日本に輸入された記録は二つ残っている（大庭脩編『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学出版部、一九八一年、六六二頁・七三七頁）。また、享和三年、山本北山が書いた『范石湖詩鈔』の序文に「今茲癸亥、書肆青黎・慶元・宮商三家、債天民・緑陰二子凶石湖詩抄上梓之事。於是二子乃取范本集及呉孟筌石湖集抄、較讎竣功、而還書肆」（今茲癸亥、書肆青黎・慶元・宮商三家、天民・緑陰二子に債して石湖詩抄の上梓の事を図る。是に於て、二子乃ち范の本集及び呉孟筌の石湖集抄を取りて、較讎・竣功して、書肆に還す）とあり、詩仏が唐本の范成大詩集を読んでいたことが分かる。

(20)

前掲注（2）に同じ、一三四頁。

(21)

中村幸彦「清新論的文学観」〔『中村幸彦著述集』第一巻、中央公論社、一九八二年〕三九五頁。

(22)

代表的なもので言えば、注（1）揖斐高氏の論文も含め、池澤一郎氏の『北里歌』における市河寛齋翰晦の方法——いわゆる「長慶以後の手段」について（中野三敏・楠元六男編『江戸の漢文脈文化』竹林舎、二〇一二年）や、新稲法子氏の「竹枝詞の変容——詩風変遷と日本化——」（滝川幸司・中本大・福島理子・合山林太郎編『文化装置としての日本漢文学』勉誠出版、二〇一九年）などの研究が挙げられる。

※本稿では、引用に際して、旧字体や異体字を新字体に改めた。また、傍点や傍線は筆者による。

〔付記〕本稿は、第四二回九州近世文学研究会（二〇二二年十二月二十七日、於オンライン）における口頭発表に基づき、加筆修正を施したものです。当日、ご教示を賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。

（おう じきよう・本学大学院専門研究員）